

カモメ対メダカ の午後

母は、昭和一桁生まれ。世界恐慌の最中に生まれ、戦時体制の真っ只中で幼少期を送った女性である。お向かいのおばちゃんも同世代で、二人は幼い頃からのご近所さん。

二人は激動の時代を逞しく生き抜いた豪傑女性だけれど、九十歳を迎え、今度は新たな得体の知れない敵、認知症と戦うことになってしまった。

あんなに強かった二人なのに、九十年という歳月を戦い続けてきた脳は大層お疲れのようで、敵に攻め込まれている。

「しりとりとか頭の体操になってええらしいよ」我が家でお茶会をする二人に、提案してみる。

「アホらしいなあー。しりとりなんかせんでも私ら頭ええよなあー」と二人は自信たっぷりに言う。

「いくでー。いくでー。ほな、メダカや」

「メダカかあ。カやな。カやな。カモメや」

「カモメかあ。メやな。メやな。そやなあ、ほな、メダカや」

「メダカかあ。カやな。カやな。そや、カモメや！」

「カモメかあ〜。メやな。メなあ〜。何があるかなあーそやなあー、メダカや！」

進まないし、終わらない。

九十歳認知症の乙女たちは、こうしてしばらく『カモメ対メダカ合戦』を笑い転げて楽しみ、生き活きと戦った。

そんな漫才のような日々は長く続かず、二人は徐々に認知症に侵略されていった。母は私を忘れていき、おばちゃんも脳梗塞を起こし倒れる。

時間は待ってくれない。母が私に問う。

「あんたのお母さんは元気にしてるんか？」ゼリーをひとくちスプーンですくって、泣きたい気持ちと笑顔を合わせ、母の口に運ぶ。

もう戻らない。あの底抜けに明るい穏やかな午後に思い出しながら、無邪気に笑う母の頬を優しく撫でた。